

出願商標「Maharaja」拒絶審決取消請求事件：知財高裁令和2(行ケ)10022・令和2年7月8日(4部)判決<請求棄却>

【キーワード】

特殊文字書体(インド語)、商標の類似(称呼・観念)、インド料理店名

【事案の概要】

1 特許庁における手続の経緯等

(1) 原告(株式会社マハラジャ)は、平成29年12月25日、別紙1記載の構成からなる商標(以下「本願商標」という。)について、指定役務を第43類「インド料理の提供、インド料理を主とする飲食物の提供、アルコール飲料・茶・コーヒー又は果実飲料を主とする飲食物の提供、ホテル・旅館における宿泊施設の提供」とする商標登録出願(商願2017-168406号。以下「本件出願」という。)をした(甲4)。

(2) 原告は、平成31年2月18日付けの拒絶査定を受けたため、同年4月15日、拒絶査定不服審判を請求した(甲6,7)。

特許庁は、上記請求を不服2019-4961号事件として審理を行い、令和2年1月10日、「本件審判の請求は成り立たない。」との審決(以下「本件審決」という。)をし、その謄本は、同月28日、原告に送達された。

(3) 原告は、令和2年2月19日、本件審決の取消しを求める本件訴訟を提起した。

2 本件審決の理由の要旨

(1) 本件審決の理由は、別紙審決書(写し)記載のとおりである。

その理由の要旨は、本願商標は、(別紙2)記載1の構成からなる登録第3002509号商標(以下「引用商標1」という。乙1)、同別紙記載2の構成からなる登録第3002510号商標(以下「引用商標2」という。乙2)及び同別紙記載3の構成からなる登録3002714号商標(以下「引用商標3」という。乙3)と類似する商標であって、その指定役務は引用商標1ないし3と同一又は類似するから、本願商標は、商標法4条1項11号に該当するというものである。

(2) 本件審決は、本願商標と引用商標1ないし3との類否について、両者は、称呼(「マハラジャ」の称呼)及び観念(「大王」の観念)を共通にするものであり、外観においては、相違するといえるものの、本願商標の要部と引用商標1の要部及び引用商標2の要部は、「Maharaja」の文字を表したものと容易に認識されるものであり、引用商標3は、「MAHARAJA」の文字を横書きしたものであって、そのつづりを共通にすることから、書体による外観上の相違が、両者の称呼及び観念が共通することによる全体の類似性を

凌駕するほどの顕著な相違であるとはいい難いことを総合して考察すれば、本願商標と引用商標1ないし3とは、互いに相紛れるおそれのある類似の商標というべきである旨判断した。

なお、原告は、本件審決の判断のうち、本願商標と引用商標1ないし3は、称呼及び観念を共通にすること、本願商標の要部と引用商標1の要部、引用商標2の要部及び引用商標3が「Maharaja」の文字を横書きしたものであり、そのつづりを共通にすることを認めている。

【判 断】

1 本願商標と引用商標1ないし3の類否について

(1) 本願商標

本願商標は、別紙1記載のとおり、中央に、波打つような曲線的な赤色の太字で「Maharaja」の文字を大きく横書きし、「Maharaja」の「h」の文字の上部に重なるように、黒色のゴシック体風の書体で「Maharaja Group」の文字を小さく横書きし、「Maharaja」の「h」の文字の下部を挟むように、黒色のゴシック体風の書体で「SINCE」及び「1968」の文字を小さく横書きしてなる結合商標である。本願商標の構成中、中央の「Maharaja」の文字部分は、視覚上、その余の構成文字部分に比して、大きく表されている上、赤色の特徴的な太字で表されており、取引者、需要者に対して役務の出所標識として強く支配的な印象を与えるものであるから、本願商標の要部として抽出できる。

そして、本願商標は、その要部である「Maharaja」の文字部分に相応して、「マハラジャ」の称呼及び「大王」の観念を生じるものである。

(2) 引用商標1ないし3

ア 引用商標1は、別紙2記載1のとおり、水平直線の下に、この直線に沿うように特徴的な書体で「Maharaja」の文字を大きく横書きし、当該文字の左上に黒色の明朝体風の書体で「Café de」の文字を若干の傾斜をつけて小さく表し、右上にゴシック体風の書体で「カフェ デ マハラジャ」の文字をやや小さく横書きしてなる結合商標である。引用商標1の構成中、中央の「Maharaja」の文字部分は、視覚上、その余の構成部分に比して、大きく表されている上、特徴的な文字で表されており、取引者、需要者に対して役務の出所標識として強く支配的な印象を与えるものであるから、引用商標1の要部として抽出できる。

そして、引用商標1は、その要部である「Maharaja」の文字部分に相応して、「マハラジャ」の称呼及び「大王」の観念を生じるものである。

イ 引用商標2は、別紙2記載2のとおり、水平直線の下に、この直線に沿うように黒色の特徴的な書体で「Maharaja」の文字を大きく横書きし、当該文字の上部に、1行ほどのスペースを設けて「インド料理」の文字を横書きしてなる結合商標である。引用商標2は、視覚上、上段の「インド料理」の

文字部分と下段の「Maharaja」の部分の2つの部分に分離して把握されるものであって、下段の「Maharaja」の文字部分が、より大きく表されている上、特徴的な文字で表されており、取引者、需要者に対して役務の出所標識として強く支配的な印象を与えるものであるから、引用商標2の要部として抽出できる。

そして、引用商標2は、その要部である「Maharaja」の文字部分に相応して、「マハラジャ」の称呼及び「大王」の観念を生じるものである。

ウ 引用商標3は、別紙2記載3のとおり、黒色の「MAHARAJA」の文字を横書きしてなるところ、当該文字に相応して、「マハラジャ」の称呼及び「大王」の観念を生じるものである。

(3) 対比

ア 本願商標と引用商標1及び引用商標2とを対比すると、その構成全体の外観は相違するが、本願商標の要部である「Maharaja」の文字部分と引用商標1の要部及び引用商標2の要部である「Maharaja」の文字部分とは、書体は異なるが、つづりを共通にし、当該文字部分から生じる「マハラジャ」の称呼及び「大王」の観念を共通にするものである。

そうすると、本願商標と引用商標1又は引用商標2が本願商標の指定役務中「インド料理を主とする飲食物の提供」に使用された場合には、その役務の出所について誤認混同が生ずるおそれがあるものと認められるから、本願商標と引用商標1及び2は、それぞれ全体として類似していると認められる。

したがって、本願商標は、引用商標1及び2に類似する商標であるものと認められる。

イ 本願商標と引用商標3とを対比すると、その構成全体の外観は相違するが、本願商標の要部である「Maharaja」の文字部分と引用商標3「Maharaja」の文字部分とは、書体は異なるが、つづりを共通にし、当該文字部分から生じる「マハラジャ」の称呼及び「大王」の観念を共通にするものである。

そうすると、本願商標と引用商標3が本願商標の指定役務中「アルコール飲料・茶・コーヒー又は果実飲料を主とする飲食物の提供」に使用された場合には、その役務の出所について誤認混同が生ずるおそれがあるものと認められるから、本願商標と引用商標3は、全体として類似していると認められる。

したがって、本願商標は、引用商標3に類似する商標であるものと認められる。

(4) 原告の主張について

原告は、①原告の調査結果によれば、インド料理等を提供する店舗において、「マハラジャ」の片仮名又は「Maharaja」の英文字を構成に含み、「マハラジャ」と称呼される店名の店舗が14店舗存在したこと（甲9ないし17、21ないし25）、②2019年に開催されたさいたま市内の複数のカレー店舗を食べ歩き、各店舗でスタンプを集めて競い合うスタンプラリー

のイベントの名称は、「さいたまマハラジャ2019」であり（甲18）、このようなイベントの名称中に「マハラジャ」の語が採用されたことは、「マハラジャ」の語がインド料理と強い関連性を有する単語であることが広く認識されていることを示すものといえることからすると、インド料理等を提供する店舗において、「マハラジャ」と称呼される店名の店舗が全国に多数あり、「マハラジャ」と称呼され、それによって「大王」の観念が生じる商標が店名として一般的に使用されているという取引の実情があり、このため需要者は、かかる商標の外観によって店舗を識別していることに鑑みれば、本願商標と引用商標1なしの3の類否判断においては、称呼及び観念が共通しているとしても、外観上の相違が重要であるというべきであり、両者を本願商標の指定役務「インド料理の提供」等に使用した場合に当該役務の出所混同のおそれはないから、本願商標が引用商標1なしの3に類似する商標であるということとはできない旨主張する。

ア そこで検討するに、原告提出のインド料理店のウェブページ（甲9ないし17、21ないし25）によれば、大阪市内の「インド料理 マハラジャ (Maharaja)」の店名の店舗（甲9）、群馬県高崎市内の「インド料理 NEWマハラジャ」の店名の店舗（甲10）、静岡県富士市内の「インド料理 マハラジャダイニング 富士店」の店名の店舗（甲11）、東京都武蔵野市内の「マハラジャ (MAHARAJA)」の店名の店舗（甲12）、山梨県都留市内の「インドレストラン マハラジャ」の店名の店舗（甲13）、京都市内の「マハラジャ」、「MAHARAJA」の店名の店舗（甲14、19）、札幌市内の「スープカレー Maharaja ～マハラジャ～」の店名の店舗（甲15）、静岡市内の「マハラジャダイニング」「MAHARAJA」の店名の店舗（甲16）、埼玉県川越市内の「NEW MAHARAJA KAWAGO E ニューマハラジャ川越」の店名の店舗（甲17）等「マハラジャ」と称呼される文字を店名に含む店舗が14店舗存在することが認められる。

しかしながら、他方で、NTTタウンページにおける業種分類「インド料理店」の2017年（平成29年）の登録件数は2162件であったこと（乙9）に照らすと、本件審決時において、インド料理店のウェブページに「マハラジャ」と称呼される文字を店名に含む店舗が14店舗存在するからといってインド料理等を提供する店舗において「マハラジャ」と称呼される店名の店舗が全国に多数あり、「マハラジャ」と称呼される商標が店名として一般的に使用されているという取引の実情があるものと認めることはできない。

また、2019年（令和元年）9月から11月にかけてさいたま市内で「さいたまマハラジャ2019」との名称の複数のカレー店舗を食べ歩き、各店舗でスタンプを集めて競い合うスタンプラリーのイベントが開催されたことが認められるが（甲18）、このことからインド料理等を提供する店舗において「マハラジャ」と称呼される店名の店舗が全国に多数あることを裏付けることはできない。他に原告主張の取引の実情が存在することを認めるに足りる証拠はな

い。

イ さらに、仮に原告の主張するようにインド料理等を提供する店舗において「マハラジャ」と称呼される店名の店舗が全国に多数存在するとしても、商標の構成文字は絶えず同じ態様で固定して用いるのではなく、使用場面に応じて書体や色彩を変更することが普通に行われていることに照らすと、「マハラジャ」と称呼される店名の店舗が全国に多数存在するからといって、需要者がインド料理等を提供する店舗において「マハラジャ」と称呼される店名に係る商標の外観によって店舗を識別している実情があるものということとはできない。

ウ したがって、原告の上記主張は、採用することができない。

2 小括

以上のとおり、本願商標は、引用商標1ないし3と類似する商標であって、本願商標の指定役務は、引用商標1ないし3の役務と同一の役務を含むものであるから、商標法4条1項11号に該当する。

したがって、本願商標が同号に該当するとした本件審決の判断に誤りはない。

結 論

以上によれば、原告主張の取消事由は理由がなく、本件審決にこれを取り消すべき違法は認められない。

したがって、原告の請求は棄却されるべきものである。

【論 評】

1. 本件は、出願商標が引用商標1～3と類似するものであり、指定役務も同一の役務を含むものであることが明らかであるから、法4条1項11号に該当するとした審決に誤りはないと判断されたのであり、事案としては難しいものではないと思う。

2. いずれの商標も、日本国内で経営するインド人による食堂であるが、同国人によるわが国における競争関係になっているのだろうか。

[牛木 理一]

(別紙1)

〔本願商標目録〕



(別紙2)

1 商標登録第3002509号商標



登録出願日 平成4年9月25日 (特例商標登録出願)
設定登録日 平成6年8月31日 (特例商標及び重複商標)
更新登録日 平成16年11月19日及び平成26年8月26日
指定役務 第42類「インド料理を主とする飲食物の提供」

2 商標登録第3002510号商標

インド料理

Maharaja

登録出願日 平成4年9月25日（特例商標登録出願）
設定登録日 平成6年8月31日（特例商標及び重複商標）
更新登録日 平成16年11月19日及び平成26年9月16日
指定役務 第42類「インド料理を主とする飲食物の提供」

3 商標登録3002714号商標

MAHARAJA

登録出願日 平成4年9月30日（特例商標登録出願）
設定登録日 平成6年8月31日（特例商標及び重複商標）
更新登録日 平成16年7月9日及び平成26年10月28日
指定役務 第42類「アルコール飲料を主とする飲食物の提供」